

カオハガン島研修 研修報告書

心理カウンセリング学科2年

私は3月の8日～13日のカオハガン島研修に参加してたくさんの経験、学びを得たと思う。

私がこの研修に参加し等と思った動機は、私は海外に行ったことがないので、今の日本以外の暮らしを体験したことがない。そこで、自分の目で違う世界を見てみたい。と思ったことが一番のきっかけだ。また島のオーナーである崎山さんがどのような考え、想いがあるのだろうと感じたこと、「何もなくて豊かな島」とはどういうことなのかが知りたいと思い、研修に参加した。

島には水道や電気が、今の生活にはあたりまえにあるものがあたりまえとしてあるのではなく、限られてしかない。また携帯電話も使えない、そして何より言語が完璧には通じない。だけれど私はその島での生活を不便だとは感じず、とても充実したものだと感じた。それはきっと島民の温かさだったり、優しさだったり、その島がいかに素敵な所であるかを感じる瞬間であったなと思う。また、この研修ではクラフト体験や小学校訪問、ホームステイ、熱帯保護区見学などといったたくさんのプログラムもあり、普段できないことばかりの経験でとても学べたが多かった。

中でも私が特に印象に残っているのが、小学校訪問とホームステイだ。

小学校訪問では、小学5年生を対象に万華鏡づくりと手つなぎ鬼を島の子供たちとしようとして研修メンバーであらかじめ計画していたことを実施した。子供たちと初めて会ったときから私たちに対する警戒心がまったくなくて、積極的に私達と接してくれたのはとても嬉しかった。午前中に万華鏡をみんなで作成した。子供たちが興味深々に私達のレクチャーを聴いてくれたおかげで、教えている私達も笑顔になる時間だった。できたものを自慢げにみせてくれたり、できた万華鏡で一緒になにかを見にいこう！と誘ってくれて子供たちの笑顔がたくさん見れてとても良かったと思う。



午後から手つなぎ鬼を企画していたために実施したが、動く遊びを伝えることはとても難しく、苦戦した。言いたいことを満足に伝えられないことのもどかしさを少し感じた。けれど、メンバー全員の臨機応変さや先生がたの力を借りて、現地のこどもたちの行っている遊びを教わることに切り替えることにした。こどもたちも真剣に私達の説明を聞いてくれて、わかってくれようとしていたのに、伝えきれなかったことは私としてはとても悔しさを感じたけれど、なによりもすぐに発想を変えて行動したこともメンバーみんなの力を感じる瞬間でもあり、また思いがあれば子供たちもついてきてくれるのだなと感じた。遊び自体も日本とはおしかったりまったく違ったりと、色々あったことがとても面白かったと思う。



滞在3日目に行われたホームステイ。半日という短い時間だが、ホームステイに行く前は正直とっても恐怖であった。現地のビサヤ語も英語も全く喋れないのに、ホームステイなんてできるのかと緊張の入り混じった恐怖だった。けれど実際にホームステイをしてみると、まったく通じないわけではないし会話がなりたないわけでもない。伝わらない事もあるけれど、でもまったくわからないわけではない。会話に詰まることもまったくなくて、恐怖に感じることもなんでもないものだと思った。私がホームステイした家族は、4人暮らしで小学生と幼稚園の男の子二人がいる家庭だった。家族はとても優しく、私のことを常に気にかけてくれていてその気持ちがとっても嬉しかった。家事のお手伝いをして、一緒にお昼ご飯を作って食べて、散歩や釣りをしたり話し合ったりと正直話しだすと止まらないくらいたくさんのがあって本当に楽しい時間であった。最初は少し人見知りしていた兄弟も午後には私の横に常に来てくれて、懐いてくれたことも嬉しかった。夜のホストファミリー交流会では、嬉しさともうバイバイをしてしまうことに思いっきり涙してしまい、私の横でホームステ

伊先のお母さんが泣いてくれていたことにさらに私は感動してしまいさらに涙してしまった。帰り際にも、お守りとブレスレットを私に手渡してくれた。半日しかいない私にこんなにも優しくしてくれたこと、そしてその半日でこの島の生活を教えてくれたことに感謝しかない。「あなたにとって私達はカオハガンでの家族だからね」と言ってくれて私はこの家族と一緒に過ごせて幸せものだと感じた。



私がこの研修を通して感じたことは、人の温かさだ。本当に島のみんが優しく、どこに行っても声をかけてくれて、すぐ話しかけてくれる。小さな子どももおじいちゃんおばあちゃんもみんなが声をかけてきてくれてすぐ話し込んでしまう。ちょっと家に寄っていきなさいなんて初対面の人に言えるだろうか。でもこの島の人たちはすぐそう声をかけて仲良くしてくれようとするのだ。仲良くなった女の子たちは、「あなたのことを忘れたくはないから、何か日本の歌をひとつ教えてほしい。それであなたのことを覚え続けていたい」とまで言ってくれて。こんなに温かい島の人たちはとても素敵だ。それと今の自分の暮らしがいかに便利でその便利さから生まれるデメリットに気付いていないかということ。今や離すことのない携帯電話で誰とでもコミュニケーションが取れる。でも、会って話す機会が減っていたりするのではないかなと感じる。人の目を見て話し合うことって、やはり大切でそこから生まれてくるものってかけがえのないものであるなと感じた。

また日本とカオハガンとの違いとして一番感じたのは、窮屈さだ。時間にいつも追われて過ごす窮屈さと、考えすぎることの窮屈さを特に感じた。カオハガンでの滞在中は時間に追われることがなくて、久々にのびのびと過ごしていた。日本にいとタイムスケジュールがきちっとしすぎている。それはとても大切であるけれど、追わ

れ過ぎることもよくないし、もっとのびのびとしていければ良いのにと感じた。考えすぎることの窮屈さを感じたのは、私が島のスタッフの佑子さんに「障がいのある子たちの暮らし方」について聞いた時だ。カオハガンでは障がいがあるからといって何かがあるわけではなく、その子の個性であるとみんなが認識して過ごしている。障がいがあるからといってのいじめなどもない。といってもそもそもいじめというものがない。それは日本、というか今のこの社会にない発想でいかに自分が窮屈な考えしか持っていないのかと痛感させられた瞬間であった。

カオハガンに行く前は不安だらけだったことが行ってみるとそんな不安なんて必要のないくらいであった。感じ取れるもの、学べるもの、たくさんあって本当に貴重な時間で、充実しすぎていたくらいだ。島の人たちとも仲良くなりすぎて1カ月くらい滞在していたかのような錯覚に陥るくらいだった。

ただ一番に感じたのは、人の温かさ、嬉しさ、もどかしさ、たくさんのこの経験と考えといったたくさんの学び、海のきれいさ、風の気持ちよさといった自然の豊かさは行ったからこそわかるもので、行って良かったと思わせるものだと感じた。



そして何より、事前研修の段階から全員で協力し、島でも楽しい時間を共にしてきたメンバーに出会えたことがとてもいい経験だ。大学でただ過ごしているだけでは絶対に出会えなかった。だけれどこうしてひとつのことに對し、1~4年生が学年関係なしに話し合い、ときには意見をぶつけあい過ごせたこともこの研修で得られたものだ。協力し合い、朝から夜までずっと一緒に過ごし、楽しさや嬉しさ、時には悔しさも共有しながらメンバーと過ごせたこともかけがえのない貴重な体験である。研修を共にしたメンバー、そしてそんな私達をフォローしてくれた先生方へ感謝の気持ちでいっぱいだ。

こうして得られたからにはその得たものを今後の生活への糧にしていくべきだと私は思う。いろいろなことを考え直すきっかけもたくさんあった。この研修で得たものを無駄にすることなく、これから自分自身の力として活かしていけたらと研修を通して感じた。

